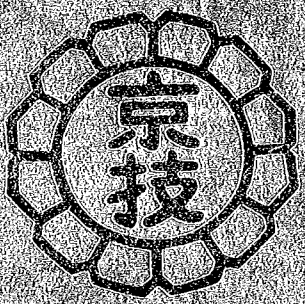
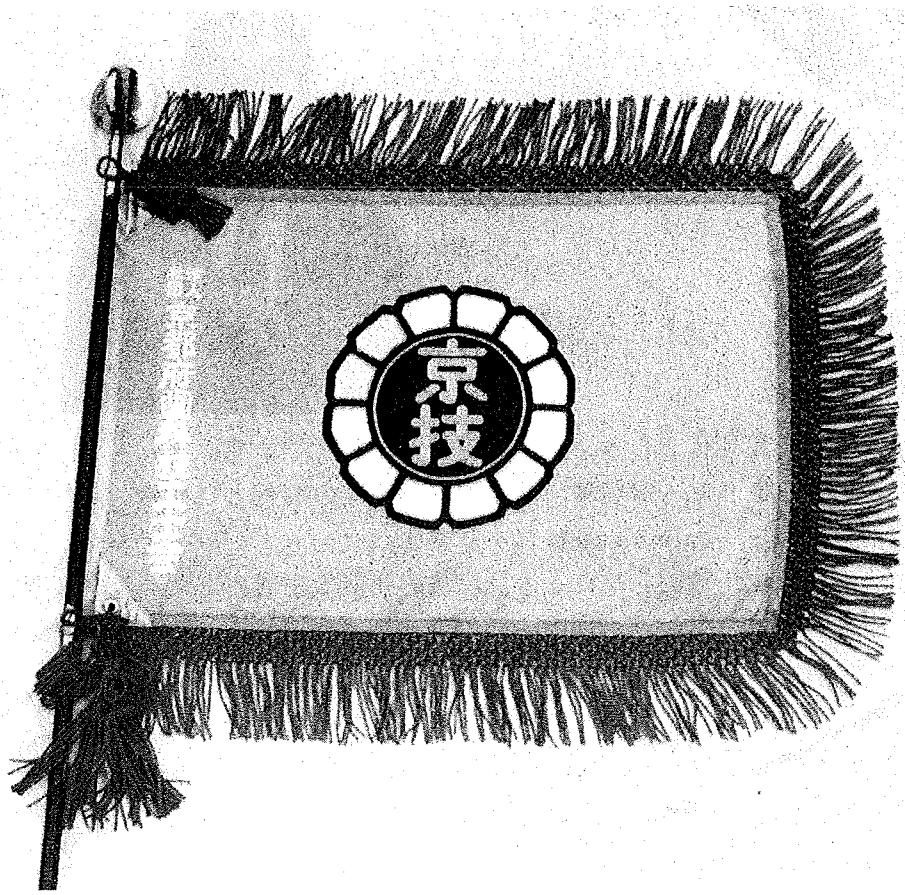
京歯技会史

創立期～昭和55年度



社団法人 京都府歯科技工士会



紋章の説明

紫地は品位を表し、紋章外枠は上下前歯の１２本を形どり、中の文字と合わせて、京歯技となり一般の人にもわかり易くしたものです。

（図案製作者　松本　　清）

紋章制定日　昭和５５年８月２３日

会旗完成日　昭和５６年６月　１日

本　会　の　目　的

定　　款

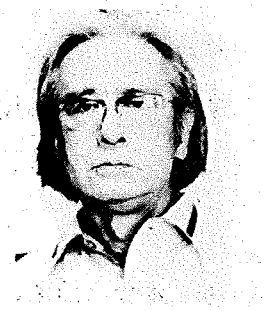
第 3 条　本会は歯科技工士の徳性を昂揚し、技術の向上発達を図り、歯科医業に寄与する事を目的とする。

第 4 条　本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 歯科技工士の徳性の昂揚に関する事。
2. 歯科技工士に関する科学と技術の進歩発達に関する事。
3. 歯科技工士の教育及び補習教育に関する事。
4. 歯科技工用資料の改良研究あっ旋に関する事。
5. 会誌・会報等の発行に関する事。
6. 会員の福祉の増進を図る事。
7. その他本会の目的を達成するに必要な事。

歴　代　会　長

初　代
亀田義八氏



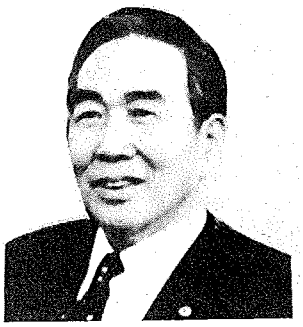
第 2 代
水中常一氏

第 3 代
香川平治氏

第 4 代
小山六郎氏

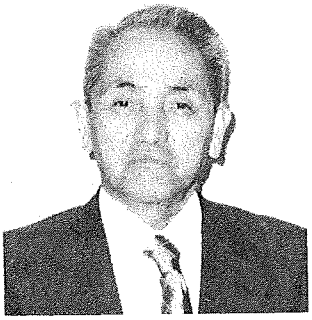
第 5 代
野々村喜八氏

第 6 代
北原兼雄氏

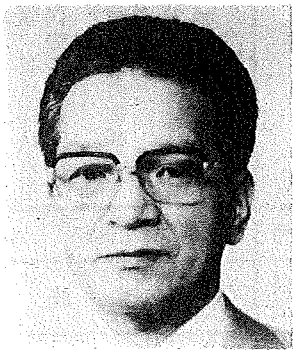


第 7 代
難 波 永 作 氏

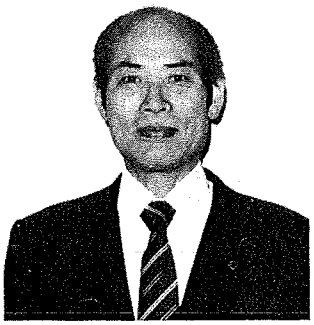
第 8 代
小 山 六 郎 氏



第 9 代
高 田 正 男 氏



第 10 代
松 村 邦 晴 氏



第 11 代
松 本　清 氏

京都府歯科技工士会年表

年号	17 ～ 30	31	32	33	34	35	36
会長在任期間	磯江	亀田	水中	香川	小		
主な行事	昭和30年7月15日　歯科技工法可決成立　8月16日公布 磯江氏死去のため、亀田義八氏を初代会長として発足 初代々表者　磯江年男氏 昭和29年10月　京都府歯科技工士会発足　会員数40名 戦時中の為一時中断、戦後連盟を再建する。 磯江年男氏理事となり全国組織に加盟する。 昭和18年　日本歯科技工所連盟発会式 昭和17年　京都府歯科技工所連盟発足　会員数40名	京都府歯科技工士会々則制定 国家試験実施される10月　府立医科大学　松風陶歯会場 国家試験準備講習会開催　全技工士受講する。	学術講習会 健保制度反対運動参加 6月　流会再度開催　社会教育会館で予算再審議 1月　歯科医師会館で総会開催、予算審議一流会	会長補佐に小山氏を推薦する。 について 学術講演会10月　合成樹脂について、技工室での問題点 京滋共済会発足　京都40名加入 近畿ブロック結成準備会開催	特例技工士廃止記念各種行事開催 2月より歯科技工士補修講座開設される　6ヶ月間 技工法施行5周年記念技工学会開催 のど自慢、野球大会 結成記念大会　技工作品コンクール、写真コンクール、 近畿歯科技工士連合会結成34年5月24日　大阪教育会館 京都社会保障推進協議会加盟 住友生命と団体生命保険契約を締結 技工士会に丹波支部誕生、臨時総会		

年号	43	44	45	46	47	48	49	50
会長在任期間	難波			小山			高田	
主な行事	日技伝連講習会 日技15周年記念大会　東大阪市民会館 京歯技会館建設委員会答申、時期尚早で白紙に戻す。 経営者部会流会、協定料金改訂調印 税務講習会、税関務と帳簿記載の実際について 学術作品発表会、歯科医師会に審査依頼 日技伝達講習会　西舞鶴で開催 福祉部のリクレーション、宝塚ファミリーランドへ 高圧ガス取扱者講習会開催 身分証明書、発行 技工士会館建設委員会発足			第一回日本歯科技工学会、国立京都国際会館にて開催する 学術講習会 歯科技工ゼミナール 京都府々市民団体協議会に加入 高令者会費免除、新卒者の本会入会金免除案可決 医療従事者の資格確認調査実施　料金協定破棄申入れ 福祉部リクレーション　丹波篠山方面へ行く 学術講演会 機構改革委員会を設ける 日技会費値上　七〇〇円となる。 推薦受諾 次期会長選挙により亀田氏を選出、辞任により小山氏を			学術研修会 京都準優勝 日技会費値上　一、一〇〇円となる。近連ソフトボール大会 グ大会 支部区域制編成替断行　囲碁・将棋・麻雀大会、ボーリン 京歯技会史の編纂を手がける 勤務技工士就業状態調査、雇用契約書を作成配布 学術研修会	

37	38	39	40	41	42
山		野々村	北　原（兼）		難　波
技工料金改正特別委員会を設ける 小山会長辞任により選管委員会開催、野々村氏選出 近畿歯技連で会報発行 弓道部を設け会員を募る 福祉部を新設、専務理事を置く、天橋立観光（福祉部） 京都府歯科医師会館建設賛助金を集める 近畿歯技共済規定が決定する 学術研修会 会員、家族の健康診断実施 運動会、野球大会、麻雀・将棋大会		学術研修会 研究 料金協定の準備と社団法人化の準備にかゝる　協定料金 京滋歯科技術者協会設立反対粉砕 活字印刷会報　年4回発行	日技伝達講習会 本会顧問に田中伊三次氏、永末英一氏に依嘱する 記念式典都ホテルにて開催 技工士会創立10周年と社団法人設立42年2月 10周年記念技工作品コンクール開催 41年2月歯科医師会と協定料金を締結 近畿ブロック改組　初代会長に北原義雄氏就任 退職金規程を完成する。技工所勤務技工士に採用		

51	52	53	54	55	56	57
松　村				松　本		
大型ラボ進出に対する経営者の問題検討 日技20周年記念式典　50年11月広島に技工学会と共催		郡部学術研修会 り田中氏発表 滋賀県技と友好ソフトボール大会、近畿学術大会　京都よ 京歯友の会しいたけ狩　54年3月日技会館落成 近畿歯技連軟式野球大会　京都優勝　岐阜大会へ出場 天然ガス転換説明会実施 日技岐阜学術大会　参加バスツアーを企画実施 国際技工学会誌会員に頒布 学術講演会　最近の神経臨床　山下敦先生 無資格者調査実施　無資格者不採用要望書会員に要請 学術研修会 日技会館建設資金調達始まる 学術講習会　郡部 10月国際歯科技工学会　国際会館にて開催　五〇〇〇人参加 優勝 支部対抗ソフトボール大会　橘女子大グランド　上北支部	会史編纂ほゞ完成 政連結成に始動、日技登録会員制度、京都学卒者会員入会 技工士法改正、日技祝賀会参加 学術講習会　展覧会開催　ポリサルホン樹脂研修会実施 京歯技会旗完成誕生　技工懇談会で新樹脂検討 京歯技創立25周年記念式典開催　功労者表彰 技工士会紋章決まる　会館審議委員会答用 フランス技工士観光団入洛　松村、宮脇、永島技工所見学 日技創立25周年記念式　亀田、小山、西川氏受賞		

歯科技工士の生立ち

古代、奈良、平安、鎌倉、室町等の各時代を通じて、中国大陸との交通によってもたらされた中国医学を、吸収・消化して次第に我が国の医学として育って来た。

平安時代の永観２年（西暦984年）の頃、日本医学の祖と云われる丹波康頼は、現存する最古の医学書（医心方）30巻を編集したが、その中には口腔疾患に関する部分も、かなり盛り込まれていた。

鎌倉時代に康頼の10数代子孫にあたる、丹波冬頼が朝廷において、一般医として典薬頭の地位にあったが、一方口科の分野にも、すぐれた技術をもっていた。

室町の時代には、我が国口科の祖といわれる、丹波兼頼（1394～1467年）冬頼の子が現われて、口科専門とする医官として、朝廷の歯科医官としての、職務を担当するようになった。

この様に口科医が生まれて存続してきたが、技工のはじまりはいつの頃かと云うと、西洋では入れ歯と称するものが、紀元前５～４世紀のころにすでにあった様である。

その頃のものは骨、象牙、カバの歯、牛の歯等を彫刻したものを、金線あるいは、銀線等で、隣の歯と結び付けたものである。

総義歯については1680年、オランダの外科医で解剖学者のアントン・ヌック（1650年～1692年）が、１個のカバの牙を彫刻して下顎の総義歯を作ったのが、始めの様である。

日本で最古の総義歯として現存しているのは、柳生飛騨守宗冬（1613年～1675年）が使用したといわれている。

床は（黄揚、ツゲ）の木で作られ、歯はろう石を彫刻している。
材料は違うが現在の総義歯に近いものである。

徳川時代に専門教育を受けた口科医のほかに、いわゆる入歯師や、歯抜きと称する人達がいた。

入れ歯を行うのを主としたものが入歯師、抜歯を業としたものが歯抜きであるが、いずれも居合抜きや、独楽回しをして客を集め、抜歯、入れ歯口中治療、売薬などを業としていた。松井源水、長井兵助の２人が特に有名である。

近世では歯科医の門下生として勉学し修業を積み、検定試験を受けて合格した人が、歯科医となったが、この検定試験制度が廃止となり、それまでは歯科医自身が行って来た技工を、除々に技工を専門に行う技工士が多くなり、昭和30年８月に技工法なるものが制定され、今まで技工を行っていた人を特例技工士として認め、国家試験に合格しなければ、歯科技工を行うことが出来なくなった。

其の後歯科技工学校を卒業した者に、国家試験の受験資格が与えられ、試験に合格した者が、技工士となる現在の制度となったのである。

◎全国組織の誕生

日技会史によると、昭和18年１月23日、東京、神田淡路町の東京府医師会館にて、日本歯科技工所連盟の発会式が挙行されたと報じられてある。

その中に京都からは、磯江年男、尾崎藤利、の両氏が参加して執行部として就任している。

尚、初年度の予算は、2,100円で、会費は一年６円、会員数は、350名とある。
昭和16年に、世界第２次大戦が起り、世界中は戦争一色となり、昭和20年８月にようやく終戦となり、その間技工所連盟も中絶状態となり、終戦の４年後昭和24年に、連盟再建の声が上り、２月23日に名古屋に於て、設立準備会が開催され、全国により20数名の参加者があった。その時京都からは、磯江年男、中村正雄、の両氏が参加、全国理事に就任した。

◎資格獲得促進同盟の結成式

昭和26年８月26日、下谷公会堂において、歯科技工士の資格獲得の促進同盟結成式が行われ、京都より磯江年男氏が参加する。

◎歯科技工士資格獲得促進同盟、全国代議員会

昭和29年２月14日、東京、銀座新聞会館にて、全国より、50余名の代議員が参集、26年に発足し

た資格獲得運動も成功を見ることが出来ず、見通しは暗いので今後どうするかと云うのが討議された。促進同盟の解散か、存続かとなり、賛成多数で、存続となり組織の変更を決定した。

◎歯科技工法の誕生

昭和30年の第22回特別国会にて「歯科技工士法案」が提出され、同年7月15日参議院に於いて、修正可決される。
続いて衆議院にても可決され、昭和30年8月16日に法律第168号として、公布された。ここに長年の念願がかない、歯科技工士会の夜明がもたらせられたのである。

◎歯科技工士国家試験準備始まる。

昭和31年1月より、全国にて技工士の国家試験の準備体制に入り、各所にて口こみ、知人等によって入会をすゝめ、国家試験に対する講習会を実施することになる。
全国技工士届出数12,000余名

◎京都府歯科技工士会誕生する。

昭和18年1月23日に発足した、日本歯科技工所連盟以来、昭和30年8月16日に制定をみた。歯科技工士の資格獲得運動に参加した京都よりの参加者でもあり、代表者でもあった磯江年男氏が、昭和31年1月3日死去された。資格獲得に東奔西走し、資格獲得もなりこれからと云う時に氏を亡ったことは、誠に残念でならない、これ等の先人の努力によって、京都の歯科技工士会は誕生したのである。

磯江時代

昭和17年

京都市左京区川端丸太町下ル
磯江歯科技工所にて、京都府歯科技工所連盟が発足する。

昭和18年1月23日　発会式

全国組織に加わる

東京都歯科技工協会	代表	寺元	武士
大阪　〃　〃	〃	中田四三三	
京都　〃　〃	〃	磯江	年男
愛知　〃　〃	〃	曽我	重郎
兵庫　〃　〃	〃	三原	駒雄

戦時下で、一時中断
昭和26年より、再発足
昭和29年10月　京都府歯科技工士会発足
事務所　京都市左京区川端丸太町下ル
磯江歯科技工所内

代表者　磯　江　年　男
会員数　40名

昭和31年1月3日　磯江氏　死去に伴い、（当年42才）亀田義八氏にバトンタッチ
昭和31年1月10日
事務所を移転する。

京都府歯科技工所協会々則

第一条　本会ハ京都府歯科技工所協会ト称ス

第二条　本会ハ京都府ニ於テ歯科技工所ヲ開設シ京都府歯科医師会ノ公認アリタル会員ヲ以テ組織ス

第三条　本会ハ歯科医師ノ介補機関トシテ歯科医師会ノ指導ノ下ニ技工技術ノ向上会員相互ノ福利ヲ図ルヲ以テ目的トス

第四条　本会ニ入会セントスルモノハ申込書ニ履歴書二通ヲ添ヘ差出スベシ、歯科医師会ノ認可アリタル時ハ役員会ノ決議ニヨリ可否ヲ決ス。本会員トナリタル時ハ京都府歯科医師会公認書ヲ交附ス

第五条　本会員ハ総会に於ケル決議権、役員選挙権本会ノ事業目的ニ対スル発言権ヲ有ス

第六条　本会員ハ会則決議事項ノ遵守本会、経費負担ニ関スル義務ヲ有ス

第七条　本会二十五名ノ役員ヲ設置ス（任期ハ壱ケ年トス）

1, 顧問　二名（医師会員）　1. 会長　一名　1. 幹事　四名

会長ハ本会ノ業務ヲ統轄ス

幹事ハ会長ヲ補佐シ役員会ニ於ケル決議決ヲ有ス

幹事中一名ハ会計ヲ司ル

第八条　本会員ハ一ケ月拾円也ノ会費ヲ分担ス　入会金ハ参拾円也トス

本会ノ経費ハ会費寄附金ヲ以テ充当ス既納ノ会費入金ハ返却セズ

第九条　本会ハ年四回ノ定期総会ヲ開催ス　必要アリタル時ハ臨時総会ヲ開クコトヲ得　本会ハ春秋各壱回会員相互の親睦ノタメ行事ヲ行フ

第拾条　本会員ニ於テ本会事業ヲ妨害スル行為ノアリタルモノ本会ノ体面ヲ汚染スルガ如キ行為アリタル時ハ役員会ニ於テ除名スルコトヲ得

第拾壱条　本会ハ事務所ヲ左記ニ置ク

京都市左京区川端丸太町下ル

昭和二十九年三月制定　　磯江歯科技工所

京都府歯科技工士会設立後第一年度収支予算書

◎ 予算総額

収入予算額　92,400円
支出予算額　92,400円
差引残高　0円

自　昭和30年10月　2日
至　昭和31年　3月31日

◎ 収入の部

科目		予算額	摘要
会費		90,000円	会員1人1ケ月200円　月平均70人　6ケ月分
	会費	84,000円	
	入会金	6,000円	
利子		400円	
	預金利子	400円	
寄附金		2,000円	
	寄附金	2,000円	
合計		92,400円	

◎ 支出の部

科目		予算額	摘要
納入費		21,000円	日本歯科技工士連盟会費1会員1ケ月50円　70人6ケ月分
	加入団体会費	21,000円	
事業費		22,000円	
	補習教養費	10,000円	学科講習会・技術研究会等
	会員福祉増進費	7,000円	会員の業務補導
	会報	5,000円	会員の消息その他年3回発行
会議費		9,000円	
	総会費	4,000円	
	理事会費	3,000円	
	役員会費	2,000円	
事務費		30,000円	
	備品費	24,000円	
	消耗品費	2,000円	
	通信費	3,000円	
	電話費	1,000円	
雑費		10,400円	
	雑費	10,400円	
合計		92,400円	

編　纂　後　記

京都府歯科技工士会会史発刊にあたつて

さる昭和50年秋挙行された歯科技工法制定20周年記念行事として発行されました日技会史編集にあたり日技より京都に31年第1回会長から40年までの京都府歯科技工士会史の歴史の資料依頼発送にあたり、京都の今日に至るまでの歴代会長理事支部長役員の皆さんの努力の歴史を調査し技工士諸兄と後輩に京都の技工士会の発展の歴史を省りみることは極めて意義深いことであると思い9月頃に会史編纂の資料あつめにとりかかりました。資料を提出頂けました各位の皆々様や各委員の努力の賜ものと感謝しております。会史作成に付き関係の皆さんの御尽力により資料が出来ました当時の高谷理事に会長年代別に原稿を種々対処していただきまして現会長松本会長時代にこの京都会史を発行するにあたり編集委員の皆様の2年の年月に際して尽力に対して深く敬意と感謝を捧げます。会史も花開き実を結ぶ時が来ました。

末筆乍ら本会の栄光ある会員諸兄の御健勝を心から祈念して本会史を送る挨拶といたします。

会史編集委員長　高　田　正　男

資料提出者名

（敬称略）

亀　田　義　八	北　原　兼　雄
小　山　六　郎	中　森　勝　造
松　本　　清	塚　上　公　夫
井　上　善　夫	高　谷　乾　次
久　保　三　徳	吉　田　栄　蔵
児　島　謙二郎	以上各位

編集委員名

委員長　高　田　正　男

西　川　勘　治

中　森　勝　造　　高　谷　乾　次
吉　岡　輝　雄　　藤　丸　昭　武
加　藤　信　夫　　岡　本　幸三郎
高　岡　　廣　　松　本　　清

会史編纂後記

中　森　勝　造

京歯技会史編纂、大変な大事業である。25周年を迎えての記念事業として先輩、諸兄から沢山の資料が提出され、各編纂委員に依って時代別に区分けされて、原稿用紙に書き込んで行く訳ですが、仕事の暇々に、又は家族にも協力してもらって約2ケ年、人にも履歴がある様に、会にも会史があります。行政改革の波も去る事ながら、企業改革は必然的に進行して行くであろう事を会史に目を通して見ても一目瞭然、自分達の現在を、そして将来を此の起伏の激しい社会にあって、地位、生活の向上、そして健康的であるためにも、叡智を結集して明日を生き抜くためにも、私達は此の職業に依って生活し、研鑽、努力の積みあげに依って家族の幸せを、会員相互の理解と共感を保つ、それが我々の責任であり倫理であると思う。

会史発刊によせて

西　川　勘　治

この度京都歯技会史の発刊出来たことを会員の皆様と共に心より喜び度いと思ふ。この会史発刊については早くより心ある人々によって要望され乍ら企画迄に至らなかったが慈に漸く陽の目を見た次第である。と角人間は過ぎたことは忘れ勝であるが、この会史の完成により貴重な記録として技工士会の歩みを永久に伝えることの意義は大きいと思う。この会史編集委員の一人として微力乍ら少しでもお手伝い出来たことを幸せに思う。

会史編纂を終えて

歯科技工法が誕生してからこのかた、京都の技工士会の歩みを綴る会史が、ようやく実り陽の目をみることとなったことは、大変なつかしくもあり、喜ばしいことゝ思います。

先輩が、それぞれの時代を、歩んでこられた偉業に触れ、記録をもとに、後世に伝えることができ得ることは、何よりも意義深いものがあります。

振り返れば、7年前、高田会長のもとで始められたこの事業も、はじめは提供された資料と取り組んでみたものゝ、どの様に事実を忠実に記述していいものなのか、悩まされたものでした。それがいったいいつのものなのか、年代が訳りにくいものもあり、今の様に情報があまりなく、薄く汚れた記録、違いのある思い出話等、それを記述するむずかしさは並々ではなかった。

任期も終り、纏めたものを渡すつもりが、何故か、もう少しと、資料を増やし、誰れにでも書いてもらえるものにと資料作りに精出してい

今期、再燃した編纂事業も、職業柄多忙にもくじけず、よくもここまで纏め上げられたものだとひときわ感慨深いものがあります。何度も直しながらコピーに明けた資料の厚みも汚れが重く感じられた。それがどうにかこうにか各委員さんの執筆に貢献できたものかと思えば、そのとき無駄に費した時間も生かされ、浮かばれてきます。各時代に触れながら、少しでも訳り易く多くの記録をと費したときをなつかしく思われます。

時の経過と共に薄れていく、会の実態を忠実に記述でき、散り果てることなく、こうして纏められたことへの意義を理解され、誰れかがいつの日にか、ふり返り、今後の歩みに役立てられれば有難いものだと思います。

高谷乾次

会史編集経過

歯科技工法が昭和30年8月に制定され、今まで組織を持たない歯科技工士も、来るべき国家試験という重大な目標の為めに、講習会の受講の必要から、京都府歯科技工士会が発足いたしました。

その後26年の歩みを続けて参りました。一口に26年と言いますが、10年ひと昔しと古人はいっているように、ふり返ってみますと永く、色々の出来事が走馬燈のように、よみがえって参ります。

その間、時にふれて「会史を早く作らなくては」と言う話が幾度となく出て参りました。しかし大変な作業だと言う事と、技工士というものは時間とのかゝわりが一番大変な作業で、その時間を編集にとられることは、誰れにでも出来ることではありません。

その様なことが訳っているだけに、積極的に実行しようと言う人もなく、いつも話しだけに終っていました。

高田正男会長になって、会史の編集委員会が設けられ、着々と準備が進められましたが、半にして任期が終り、その後4年間作業が中断されました。

その当時編集委員であった私が会長となり、会史完成をかたく決意し、高田正男氏を委員長として、再度会史編集委員会を編成致しました。

今では発会当時の記録も少く、資料も散逸していて、当時の事を知っている人も、早や故人となられる人もあり、26年前の記憶もだんだんうすれるのも、当然の事であります。

この様に先へのびればのびる程、だんだんとむつかしい事となるので、せめて今ある資料だけでもと、委員会の皆さんのご協力をお願いし、一字づつでもと書く事を始めました。

技工士の一番苦手な書くことは、口でいう程なまやさしい事ではありません、始めてみて大変な作業だという事を、思い知らされました。

この作業は1人や2人で出来る事ではなく、全会員の協力と、会の事業として取り上げなくては、

達成出来るものではありません。

会員の皆様のご協力をお願い致しますと共に、編集委員の皆様のファイトとご努力に心から感謝致します。

昭和55年6月

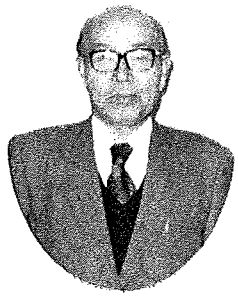
松本　清

会史編集作業分担

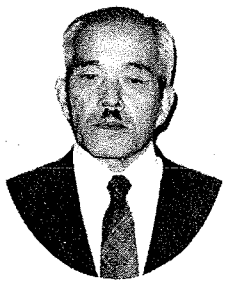
高田　正男	高田会長時代
西川　勘治	水中会長時代 野々村会長時代
中森　勝治	難波会長時代
藤丸　昭武	難波会長時代
加藤　信夫	亀田会長時代
岡本幸三郎	小山会長時代
高谷　乾次	小山会長時代 編集後記 全文まとめ 年表
吉岡　輝雄	北原会長時代
高岡　廣	写真
松本　清	表紙 創立期 香川会長時代 小山会長時代 松村会長時代 松本会長時代

会史編集委員氏名

高田正男委員長

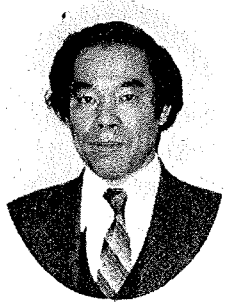


西川勘治氏



中森勝造氏

加藤信夫氏



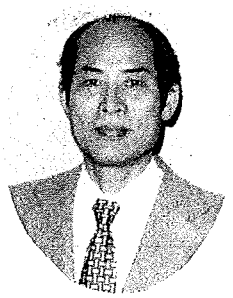
高谷乾次氏

吉岡輝雄氏

岡本幸三郎氏

藤丸昭武氏

高岡　廣氏



松本　清氏